

学びの再構築

学習指導要領改訂へ向け準備が進んでいる。

今回、次期改訂へ向けての準備で特徴的なことは、昨年度、論点整理が出たことだろう。

その意義は、早めのスケジュール設定もさることながら、改訂の主旨（哲学、思想）や要点を示し、周知を図っていることである。

論点整理の中で、「3つの柱」が示されている。

何ができるか（知識・技能）・・・基礎基本

どこで使うか（思考力・判断力・表現力）・・・活用

よりよい人生を送るか（意欲）

現行の学習指導要領においても、「基礎基本の確実な習得とその活用」は目標にされていて、次期学習指導要領でも継続されるようである。

しかし、全国学力状況調査や多くの都道府県で独自に行われている学力調査において、「活用力」育成が課題になっている状況である。

活用力を育成するために、授業改善が行われ、学習評価においても活用力を評価する問題が多く出題されている。

このような指導と評価が一体化し、授業改善が行われることは良いことである。しかし、ここに落とし穴がないか心配している。

素朴なことだが、いつの時代の子供にとってもテストは重要なものであり、がんばる対象（学びの目標）である。

そのテストに、活用を問う問題が多くなり、（極論だが）クイズのような問題が多く出てこないか心配している。子供は「このクイズのような問題ができればいい点数がもらえるんだ」と思ってしまう恐れがないだろうか。無いとは思うが、クイズは解けて、簡単なローマ字や計算ができない心配である。

この活用は、（先に書いたが）あくまで、基本があって備わっていて、その基本を如何に使うかであって、基本の確実な習得が前提であることだ。

B（活用）が目標であればA（基本）が必要なのであって、B（活用）が目標であればB（活用）を行えば良いというものではないということである。

今日は、回りくどいことを書いたが、要は、基本をしっかり身につけ、それを如何に使いこなすか、である。バランスの良い学び、教材に応じた授業展開を行う必要があることである。

やはり行き着くところはカリキュラムマネジメントか。